

ヒロシマ音楽譜

作品が紡ぐ復興

②

一編の詩が、さまざまな作曲家に歌い継がれていく。被爆3年後に広島を訪れた英国の詩人、エドモンド・ブランデン

エドモンド・ブランデン

ドモンド・ブランデン(1896~1974年)

の詩もその一つ。英国を代表する詩人であった彼は、灰じんに帰したはず

の広島復興ぶりに感銘を受け、翌年のヒロシマ平和祭に詩を寄せた。「ヒロシマ 一九四九年八月六日に寄せて」(寿岳文章訳)。

詩は、日本語歌曲の大家、山田耕筰により合唱曲となつてその平和祭で披露された。山田自身は、被爆直後の演奏旅行の途

再生する街感銘の詩

はやもいきづく まちの笛とソプラノ独唱が入り、50分余りに及ぶ大作。原爆被災だけではなく、軼や音戸の民謡が使われるなど広島歴史と風土がテーマとなっている。

詩は別の作曲家の目にとまる。「花の街」で知られる團伊玖磨は、広島青年会議所の依頼を受け交響曲第6番「HIROSIMA」を作曲した。

その終楽章の後半部分にブランデンの詩は現れる。なかでも團が共鳴したのは、焦土から立ち



①1948年に広島を訪れ、当時の広島女学院講堂で講演するブランデン
②ブランデン直筆の詩「ヒロシマ 一九四九年八月六日に寄せて」

HIROSHIMA
A Song for August 6th, 1949
Out of the night that covered her
The stricken town began to stir,
Out of bewilderment extreme,
The fierce vexation of a dream,
She raised herself in parching pain:
And no man heard her once complain.
It seemed, for what was gone for ever,
Speedily woke a new endeavour,
Out of darkness, out of fire,
Sprang new radiance, new desire;
The stricken city rose to see
Not what has been but what will be
Hiroshima! no fester pride
Did ever earthly city guide
Than yours, - to be the happy nest
Where the glad dove of peace may rest,
Where all may come from all the earth
To glory in mankind's rebirth.
Edmund Blunden

国境を越え 継がれる心

上がる人々の姿が人類賛歌へと昇華される結

句であったようだ。「ヒロシマ」よりも誇らしき名をもつまちは世にあらず」で始まるこの最終節は、交響曲全体のクライマックスとなる。ブランデンの受けた感銘は、なおも響き続けた。この曲では詩句の歌唱とともに、「ヒロシマ」が冒頭から終始、不協和音が唱和される。反核運動が高まっていた時代に、ブランデンの詩を世界はどのように受け止めただろう。(広島大特任助教・能登原由美)